

[ジブチ]

協力隊の教え子が 世界陸上大阪大会に出場！

今夏、大阪で開催された世界陸上にジブチの選手2人が出場した。
彼らの奮闘を支えたのは青年海外協力隊員だった。

Close Up!

24

ジャイカの
あしあと



国民の94%がイスラム教徒という、東アフリカの小国ジブチ。今年7月、夕闇が迫るグラウンドでは、頭にスカーフを巻き真剣なまなざしで走るランナーと、ストップウォッチ片手に彼らの指導に当たる青年海外協力隊員、渡邊森彦さんの姿があった。

「どんな状況でも基本を忘れるな」。渡邊さんの声に、これまで以上に力が入っているのは、8月25日〜9月2日開催の「第11回IAAF世界陸上競技選手権大会大阪大会」の女子100メートルで教え子のファティア・アリ選手（写真右から2番目）が、男子800メートルでフアラール・モハメッド選手が出場するためだ。アリ選手は「いつか世界のチャンピオンになるために今大会で世界のレベルを感じたい」と意気込む。また、モハメッド選手は「決勝まで残りたい」と日夜練習に励んでいる。

「彼らの出場はジブチ陸上発展の力ギになる」と語るのは、1988年のソウル五輪や国際マラソンで活躍し、現在ジブチ陸上競技連盟の役員を務めるロブレイ・ジャマさんや指導員のアーメッド・サラールさんら。80年代、ジブチ陸上は数々の国際大会で上位を争うなど全盛期を誇っていた。だが、1年の約半分が40度を超える同国の気候はトレーニングするには過酷な上、スポンサーがおらず設備も整っていないため、有力選手は恵まれた環境を求めて欧州へ移住、徐々に衰退していった。そうした中、サラールさんが陸上の活性化に尽力し、2000年、JICAは選手強化や若手指導者の育成に向けて協力隊の派遣を開始した。

3代目の隊員である渡邊さんは、2人の選手について「世界の強豪が集まるこの大会で実力を発揮し、その経験をほかの選手たちにも伝えたい刺激を与えてほしい」と期待している。

212カ国からトップクラスの選手が集まる世界陸上。その大きな舞台に立った2人の選手の健闘は、ジブチ陸上の再起を図る一歩となるだろう。

